

『赤い鳥』誌における鈴木三重吉の「表現」概念の位相

茨城大学教育学部 大内 善一

キーワード：表現，叙写，形式と内容，『赤い鳥』，鈴木三重吉

1. 本研究の目的

本研究は大内がこれまで取り組んできた昭和綴り方・作文教育史研究の一環である。大内はこれまで昭和期の綴り方・作文教育を通史的に辿りながら、そこに出現してきた教育内容論に関わる「内容か形式か」という二元論的な対立の図式について考察を巡らしてきた。

大内自身のこの方面に関する研究史については拙稿「菊池知勇綴り方教育論における『生活』と『表現』の一元化への志向」（『茨城大学教育学部研究紀要・教育科学』第52号，平成15年3月）に記しておいたのでここでは省略に従う。

また，大内以外によるこの方面に関する研究史については第104回の本学会における大内の発表「綴り方・作文教育論における『生活』と『表現』の一元化に関する先行研究」（大会発表要旨集）に記しておいたのでこれも省略に従う。

これまで、『工程・綴方学校』誌、『実践国語教育』誌、『綴方生活』誌、『北方教育』誌、『教育・国語教育』誌、『国語教育』誌（大正期及び昭和期）における「表現」概念の位相に関する考察を行ってきた。今回は『赤い鳥』誌における主宰者・鈴木三重吉の綴り方の選評指導を大正7年7月の創刊号から昭和11年10月号までの通巻196号で辿りながら，そこに現れた「表現」概念の位相に関して考察を加えていくことにする。

2. 『赤い鳥』誌の性格

児童雑誌『赤い鳥』は大正7年7月，漱石門下の文壇中堅作家鈴木三重吉によって創刊され，昭和4年1月号を発刊した後，財政難を理由に休刊を余儀なくされる。しかし，同6年1月になってから復刊し，同11年8月の三重吉の死まで続き，同年10月に三重吉追悼号を発刊してその歴史を閉じている。

これまでの研究では，『赤い鳥』の運動を上記の休刊期を挟んで前期と後期とに分けることが大方の定説となっている。『赤い鳥』はこの両期を通じた

19年間にわたって児童芸術運動，芸術教育運動，文章表現指導運動を繰り広げている。

『赤い鳥』誌創刊の意図は創刊に際して配布されたプリント「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」に端的に表明されている。これによれば，主宰者の三重吉がこの雑誌全体の文章表現を「作文のお手本」としたいと願い，募集作文を「著しい特徴の一つ」として，「少しも虚飾のない，真の意味で無邪気な純朴な文章」を要望し，「空想で作つたものでなく，たゞ見た儘，聞いた儘，考へた儘を，素直に書いた文章」の投稿を切望していたことが分かる。

こうした創刊の意図に沿って三重吉は『赤い鳥』誌に投稿される綴り方作品に対して詳細な「選評」を附していくことになる。この選評は刊行を重ねるに従って次第に丹念な長大なものとなっていく。そして，この選評指導を通して確立されていった三重吉の綴り方文章観・綴り方指導観は「文芸的綴り方アリズム」（滑川道夫著『日本作文綴り方教育史2大正篇』昭和53年，国土社）として定説化されている。

3. 『赤い鳥』誌における文章表現指導運動に関する先行研究

この雑誌が果たした児童芸術運動，芸術教育運動，文章表現指導運動としての役割については先学による様々な研究が存在する。大内はこれらの先行研究を踏まえつつ「秋田の『赤い鳥』綴り方教育—高橋忠一編『落した銭』『夏みかん』の考察を中心に—

（『秋田論叢』第13号，平成9年，後に拙著『国語科教育学への道』平成16年，溪水社，に収録）と題した小論をまとめた。この中で大内は峰地光重，中内敏夫，滑川道夫の三者による先行研究を取り上げた。これらの三者に共通する見解は，前期の『赤い鳥』綴り方作品に対する三重吉の選評が，筆者である子どもの現実の生活に対する認識の傾向，さらには生活の問題そのものには向けられないで，あくまでもその文章表現能力の進歩発展にのみ向けられていたこと，三重吉の言葉で言えば「叙写の能力」の

優劣如何に限定されていたというところにある。つまり、選評指導の中心が「表現指導」のみにあつて「生活指導」的側面にはほとんど触れられていないという点にあつた。加えてこれらの三者は前期末から後期にかけて、『赤い鳥』の綴り方には次第に自然主義的・現実主義的なリアリスティックな作品が登場してきたとも指摘している。ただ、三重吉の選評姿勢に対する評価には三者の間に微妙なズレが存在する。そこで大内は、これらのズレに関して考察を加え、三重吉の『赤い鳥』綴り方教育運動における文章観や綴り方教育観には、「叙写の腕」の優劣如何という一点に指導の目的を絞った文章表現指導を通して子どもの「人間的成長」を促していこうとする強い意志が貫かれているということを明らかにしている。

4. 鈴木三重吉『綴方読本』に見る「表現」概念

鈴木三重吉の『綴方読本』（昭和10年12月、中央公論社）は三重吉の最晩年の著作である。したがって、この本には三重吉による大正7年から昭和10年までの『赤い鳥』綴り方教育運動の成果が集大成されている。そこでひとまず、『綴方読本』において三重吉が考えている「表現」概念について見ておくことにする。ただし、三重吉が『赤い鳥』誌上で繰り広げた選評指導においては「表現」概念の細部にわたる生成と展開が見られるので、その生成・展開過程に関しては次節で詳細に考察を加えていくことにしたい。

三重吉の「表現」概念を捉える上で重要な手掛かりを与えている用語がいくつかある。「叙写」「描写」「叙述」「観察」といった用語である。これらのうち、最も使用頻度が高く三重吉が独自に用いている用語は「叙写」という言葉である。この「叙写」という用語の概念、とりわけ「描写」という用語との異同に関しては、次節で詳細に見ていくことにして、本節では『綴方読本』の中で三重吉が直接取り上げている「表現」という用語自体に関して、三重吉の考え方を見ておくことにする。

三重吉は「表現」に関して次のように述べている。

綴方の制作については、言葉の使い方が極めて重要な効果関係をもつのはいふまでもない。こゝで私の言葉とは、単なる用語といふ意味で、表現そのものゝ意味ではない。記述、叙写の外形を造つてあるつながりの中の、おのおのの一語を指し

たのである。

私は言葉の連続の外形を表出と呼んでゐる。選評にもたびたび出てゐるとほりである。

表現といふのは、一般に理解されてゐるごとく、記叙の外形たる、表出と、その表出の中に盛り入れられてゐる記叙の実質的内容とを、併合して言つた術語である。

絵にたとへて言へば、言葉は使用する絵の具そのもの、表出は絵にぬられてゐる絵の具の或分量であり、表現は、かきあらはされたる絵の、おのおのの小さな部分に等しい。つまり表現は、画面の一部に附着した絵の具が、線となり形となり色調となつてあらはしてゐる、描写の外形と内容そのものである。

ここに述べられている三重吉の「表現」概念は実に明確であり適切でもある。大内がこれまでの一連の継続的な研究の中で一貫して主張してきた考え方とぴったりと一致する「表現」概念である。三重吉は「表現」を「記叙の外形」としての「表出」すなわち文章の形式的側面と「記叙の実質的内容」とを併せた、「形式」・「内容」を一元化する概念として捉えているのである。

以上に見た三重吉の「表現」概念は三重吉の最晩年に刊行された『綴方読本』に記されているものである。以下には、このような三重吉の「表現」概念の細部にわたる生成・展開過程を『赤い鳥』誌の創刊号から辿つて、その内実に迫っていきたい。

5. 『赤い鳥』誌の綴り方選評に見る「表現」概念の位相—選評を通しての三重吉の文章表現指導の実際—

(1) 『赤い鳥』誌の初期における三重吉の綴り方文章観

三重吉は『赤い鳥』創刊号（大正7年7月）の「募集作文」欄の「選後に」の中で「文章は、あつたこと感じたことを、不断使つてゐるまゝに書くやうにならなければ、少くとも、さういふ文章を一ばんよい文章として褒めるやうにならなければ間違ひです」と述べている。

三重吉は大正7年11月号から「綴方の研究」の連載を7回にわたつて行つてゐる。教育現場の教師達からの質問に答える形で当時の綴り方教育に対する考察・批判を行つてゐる。その1回目でも三重吉は綴り方の根本が「知識的又は思索的記述ばかり」でな

く、「内面的及び外面的のすべての事象を自由に表現する能力を開発する事」であるとし、「知識的又は思索的記述」はこの「内面的事象の表現」の中に含まれるとしている。そして、これらの事象の記述中で「子供が一番興味を以て書き得るもの」で「子供の各自の個性を最よく表示させること」ができ、「表現の能力を養成するのに一番便利で効力の多いものは、子供が現在眼の前に、又は比較的最近に、もしくはすべての過去に於て一番深く印象に刻んである事実の記述であるに相違ありません」と述べている。

大正8年12月号では、長野県の教師・横山正名から送られた綴り方実践ノートの中の「内容さへあれば形式は自然と出て来るものだ。形式の方をいくら突ついても内容的には寸分も延びるものではない」「すぐれた内容そのものは形式のためにその光りを失ふやうなことはない」「形式や方法はみな自由な生命の動きを縛るだけのものである」といった意見を受けて、「私も至極同感です。特に下級生の場合に於てさうです」と賛同して、横山の研究的態度を励ましている。この横山の文言から窺えるのは明治期の形式主義作文からの解放と内容主義の台頭である。三重吉はこの横山の内容主義に同感しつつも「特に下級生の場合に於て」という文言によって、一方的に内容主義に傾斜することへ釘を刺していると思なせる。

また三重吉は、大正9年4月号の「綴り方研究(その5)」において、「綴方を単なる子供の文章だなど考へるやうな、浅薄な見方から絶対に離脱してもらはないとお話も出来ない」と述べて「綴方といふものは、換言すれば、われわれの後継者たちの感情思想の表現に対する基本的な、又は、考へ方によつては、その表現方法そのものゝ全部の教養」であると規定している。

(2) 「描写」「叙写」という用語の出現

三重吉の『赤い鳥』誌の「綴方選評」の中には「描写」「叙写」という用語が頻繁に出現する。しかし、これら二つの用語が選評の中で初めて出現するのは、「綴方選評」の中でなく、大正9年12月号の「童話選評」の中においてである。「人物や事件の写実的な描写がまだまだひよろひよろしてゐます」「叙写の上の感受的な技倆に欠けてゐるところから無意識に陥つた欠点です」といった文脈で出現している。「描写」「叙写」という用語は大正10年10月号の「童

話選評」の中でも、「描写」は「心理描写」「環境的な描写」「事實的描写」と3回、「叙写」は4回出現している。「童話選評」欄で使用が始められたことに注目しておきたい。

「描写」という用語が「綴方選評」において初めて出現するのは大正10年3月号である。以下のような文脈で登場する

入賞第一の小林さんの「うちのかあさん」は本当に子供の真実と簡朴との値を誇るべき好個の傑作です。すべての情景が、ひしひしと胸に迫って一人ではほろりとして来ます。どなたも、たゞこれだけの描写が、こんなに力強く人を引きつける所以を考へて下さい。こんな作を見ると、余計な工作や技巧の無駄なこと有害なことが切実に分るでせう。

「描写」表現の効果についてその意義を指摘しその他の表現技巧については排している点が注目される。なお、「描写」という用語は大正10年11月号や大正11年1月号の「綴方選評」欄にも出現しているが、以後は圧倒的に「叙写」という用語が多く出現してくることになる。

ただし、大正10年7月号には『つくしんとり』は本当に自由な、いきいきした写実の作品です」という表現が出現し、同年9月号には「対話を写実的に生かす」とか「二人の子供がありありと写せてゐます」(以上の傍線は大内)などといった表現が出現してきている。そして、この後、大正10年12月号の「綴方選評」から初めて「叙写」という用語が以下のような文脈において登場している。

第二入賞の、土橋さんの「おひろ」は、目をつけた材料は、これまでも例のある、だれでもかきさうなものですが、叙写としては立派なもので馬鹿のづうづうしいところ、汚ならしくも哀れつぽいところが遺憾なく写しこなされてゐます。(傍線は大内)

また、大正11年2月号には以下のような文脈において使用されている。

今度の入選作の第一においた、「学校へ行く道」は、叙写としては実にうまいもので、みんなの言動や、川の中をもがき廻る子猫の実さいが、一々まざまざと目のまへに見えます。(中略)

簡単な叙写でもつて、みんなの動作や気分が活き活きと写せてゐます。(傍線は大内)

「描写」という用語に替わって、上記のように、

「いきいきした写実の作品」とか「対話を写実的に生かす」「ありありと写せてみます」といった用語の使用例が出現して来て、その後「叙写」という用語が「遺憾なく写しこなされてみます」「まざまざと目のまへに見えます」「生き活きと写せてみます」といった文脈で使用されていることが分かる。

こうした使用例から判断するに、三重吉の中では「叙写」という用語が「描写」という用語の概念に極めて近いところから使用され始めていると見なすことができるのである。

(3) 「叙写」という用語の用法に見る「表現」概念の位相

大正11年以降、三重吉の「綴方選評」には頻りに「叙写」という用語が出現する。勿論、「描写」という用語も少しずつ出現してはいる。「叙述」「叙出」といった用語もわずかずつ出現する。以下に、これらの用語の用法との比較を通して「叙出」という用語の意味用法について明らかにしていきたい。

大正14年7月号に掲載された「ひっこし」という作に関する選評の中に、「むりやりの努力なしに、すらすらと写した単純な描写でもつて、一々の事実と、その場の空気とをありありとゑがきうかべてみます」という一文がある。これと同じ作に対して「お父さまの学校の小遣いさんが、『ぼつちやんはこつちからいかう』と言って分れ分れに行くところなぞでも、たゞそれだけの単なる叙写でもつて、女中さんや小遣いさんや喜久子さんの表情や動作や声まで、ありありと目に見えて、思はずほゝゑまれて来ます」という一文がある。この二文の内容を比較すると、同一作品に対する選評の中で「描写」と「叙写」という用語がほぼ同一の意味内容で使用されていることが理解されよう。

大正14年12月号には「ありのまゝの事実を、苦もなくツバツバと再現しつくして、けろりとしてゐると言つたやうな、とてもたつしやな、元気のいゝ叙出で、はじめからしまひまでの一々の推移が、ピチピチはねかへるやうに生き動いてゐます」という一文がある。また、「展出された事実の上では勿論のこと、叙写の流動そのものにも、小山さんの性格がすっかり踊り出てゐて愉快です」「叙写として、いさゝかの無駄もなく、すべてのいきさつを着実に写してゐます」といった一文もある。これらの使用例を比較してみると、この「叙出」という用語も「描写」「叙写」という用語と極めて近い意味で使用さ

れていることが理解されよう。

大正15年4月号の「綴方選評」には「低年生と地方語的表出、日記の記録と綴方の叙写」というタイトルが付いている。この中で三重吉は「日記では、事実を叙写するといふよりも、その日その日の事件を、何もかも一々かきつける意味での記録ですから、一つのことを、精密に実写する必要もありません」として「かういふものを、いくらまいにちどんどんかいたところで、綴方の叙写の腕は上るものではありません」と述べている。その上で、綴り方の場合は「一つの纏つた焦点的な事象をとらへて、それを進行的にも感受的にもよく見つめて、陰影をつけてくつきりと彫りうかべて行かなければ価値はありません」と断言している。「記録」という表現機能と比較することで「叙写」の描写的な表現機能が浮き彫りにされていると言えよう。

(4) 復刊後の選評指導に見る「表現」概念の位相

『赤い鳥』誌は1年間の休刊後、昭和6年1月号を復刊させた。この号の「綴方講話」の中に「お父さんが手をたゞくときに手をなでまはしなでまはしして目をつぶつてたゞくといふ叙写(うしつゑがくこと。描写)なども、あどけなくて滑稽であり、且つ場面が実感的に出てゐます。(実感的といふはわれわれが、その実さいを見て感受するかのやうに、まざまざと活写して見せてくれるといふ意味。)」という文言が出て来る。「叙写」が「描写」と同義であることが表明されている。

そして、復刊第2号の同年2月号には「叙写にしても、すべて言葉に何の装ひを用ゐず、単朴なまゝの表出をもつてして、まざまざと実景と気分とを浮かべてゐます。本当に理想的な、いゝ表現(表出と内容の二つを合せた意味です。)」と述べられている。『綴方読本』で規定されている「形式」「内容」一元の立場からの「表現」概念が明示されている。同年10月号には「表現の態度」「表現への感触」「純な表現」「簡朴な表現」といった文言の中で「表現」という用語が9箇所にもわたって使用されている。

昭和7年9月号では「総合叙写」「展開叙写」という表現方法について事例に基づいて解説が為されている。

復刊後の三重吉の「綴方選評」はいよいよ詳細を極めていく。当日の発表では、そうした選評の詳細を辿りつつ、三重吉の「表現」概念の位相を明らかにしていきたい。